通信第三十二号　　私のための報恩講

　一月の二十五日から二十七日まで長仁寺の私における住職としての最後の御正忌報恩講が勤まりました。長仁寺の前には菜園があります。今年は豊作です。三十年前はご門徒さんから野菜を頂き田舎の人びとの温かさを知らされました。最近はご縁の方に私から野菜をさしあげることもあります。喜んで下さるのを見て差し上げる事の喜びを頂いています。や野菜を見て思わされました。昔は在家報恩講や寺の報恩講の食事はすべて手作りでした。報恩講を心待ちにする同行さんはの同行たちの顔や講師のことを思いながら作っていたのかな。そういう人は少ないにしても必ずいたにちがいないなと初めて思わされました。二十五日から二十九日までは愛知県春日井市の平松仁さんがお泊りです。その菩提心に頭が下がります。二十六日から二十八日までは富山の超願寺、妙敬寺さん。二十八日、二十九日は聞光道にアメリカのニュージャージー州から名倉幹開教使、愛知県豊田市の長坂幸子さんがご来寺です。体力が持つか少し心配がありました。

　そういう中で六名のご門徒さんが法名頂きたい、帰敬式を受たいとのうれしい申し出がありました。京都から帰って三十一年間の歩みにご門徒さんから大きなプレゼントを頂いた気が致しました。六人に起こった菩提心に頭が下がります。間際に二名の方の追加の申し出がありましたが間に合わず春の彼岸に行うことに成りました。如来様が母の口をかりて「長仁寺が信心の燃えている寺になっているか」と問われたことに「ささやかでも火がきましたよ」とじられます。

　一週間前から準備が始まります。買い出し、地区の門徒さん総出の仏具磨き、掃除、幕張、お盛り、色づけ、役割の話し合い等々「他力回向の信心」に焦点が当てられるとこうもスムーズに仕事がはこぶものか「わしに帰依したらこうなるだろう」と如来様から見せて頂くようでした。

山門の掲示板に帰敬式をご縁として大石先生のおことばを書かせて頂きました。

　　人生の行き詰まりを縁として

　　新世界へ少しでも救われて下さることよって

　　私が助けて頂いているのです

本堂の掲示には

　　喜ぶのも我が喜ぶのではありませんよ

　　仏様が私を救って仏様が喜ばれるのですよ

　　そこまで証明して下さると

　　私の方からの言葉は消えます

　　お念仏はお礼です

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　大石法夫先生

仏さまのお喜びは自我の自己満足の喜びではありません。私は自我から手を出して如来様の邪魔ばかりして来たのです。自分の思い通りに自らも、人をもしようとしてからまわりをして来たのです。今でも自我がでたらそういう結果になります。私の方からの言葉が消える。これは自力の自我からは絶対に不可能な事ですから、自我からの言葉が消されると南無阿弥陀仏とお礼にならされます。不思議にも心身の濁りが消されて自由さや軽安や柔らかさが感じられて南無阿弥陀仏とお礼に成らされます。対立のままに一つの世界に帰らされて言えることも言えて不思議にお礼がしたくなります。なぜか有難いのです。

さて、大石先生の掲示板の二つを書かせていただいて、あらためて「自分のための報恩講」とならされました。法名を付けさせていただく、法名を入れる額を買いに行く、御剃刀は親鸞様のご絵像の前に置きました。若い頃は絵像の前で「何のための報恩講なのか」、儀式、形式をこなす、習慣の中での僧侶とのお付き合い、地域の人間関係等々に振り回されて、「親鸞様はいったいどこにおいでになるのだろうか。御恩報謝などどこにあるのか」とくやし涙が出た場所です。このたびは親鸞様、蓮如上人、大石先生がともに喜んで下さる感じがいたしました。帰敬式はうれし涙をお同行さん方と共にしました。

宿帳に渡邊尚子前坊守さんが安田梅さんから頂いたお言葉をされました。

　　生活をもって

　　信心を磨く

わたしは刺激をいただいて

　　宿業が転じられて

　　信心が生長される

と受けました。娘の事、孫の事、次男の事、両親のことなどなどが生きて来たからです。

「石・・なんどを、よくことなさしめんがごとしとたとえたまえるなり」（親鸞聖人作・『唯信鈔文意』）生まれたご因縁の家や両親そして寺が暗くみすぼらしく感じながら育った私は何とかして寺を良くしようとあがきました。しかし、どうにもならず自分の信仰にも行き詰まった時に大石法夫先生に出遇わせて頂きました。「江本さんが一生や二生どれだけ努力してもどうにもなりませんよ。何生もかかって来た業縁（宿業）です。ただし、本願が信じられたら、過去生からの将棋倒しに迷って来た業縁が転じられ、本願に立ち上がられます」といわれてから二十五年たちます。

今、お内仏の写真を拝しつつ先祖のかたから「私らのどうしても求めて得られない問いを明かにしてくれてありがとう」と一瞬ですがお礼をされた感じがしました。大きな宿業のおかげ、大石先生との出遇い、親鸞様の本願の教えのお蔭であります。

先生は「お念仏は生きている、お礼です」とよく言われました。朝の勤行はご和讃あと先生のご書信に日々触れさせていただいています。名号と念仏のおたとえがありました。

「教行信証」行巻中の聖人さまのお言葉です。

　「まことに知んぬ。徳号の慈父ましまさずば、の因欠けなん。光明の悲母ましまさず　　　ば、の縁そむきなん。の因縁和合すべしといえども、信心の業識にあらずば、光明土に到ることなし・・・・・」

　　　聖人は、ご名号を父にたとえられ、光明のことを母にたとえておられます。我々が浄土に生れ、成仏できる因はご名号で、**ご名号は生きているのです。精子が生きているように。**しかし、精子は人間ではありません。人間となるべき因です。その因が、母胎の中で人間となるべく成長するのを、光明の縁と申されます。仏様の教えのことを光明と申されるのです。求道者の無明の闇を破って下さるからです。

　　　名号の中に宿る仏の御生命が、光明の縁に育てられて、母胎から子が「オギャァー」と産声をあげるように、仏性が「南無阿弥陀仏」と口をついて出て下さるのを、浄土真宗では「ご信心」と教えて下さるのです。故に、**お念仏のほかに、ご信心はありません**。又、真実信心には必ず名号を具すと仰せられています。ここを「一念発起」また、「南無」「帰命」と申され、『正信偈』の最初の二行に、聖人様は信心発起の告白をされています。

　　「帰命無量寿如来　南無不可思議光」

　　　お念仏が出て下さった時は、無明の闇が破られ、尽十方無碍光の世界に生れさせて下さっているとは、讃嘆する言葉もありません。せんじつめてお念仏となって、讃嘆させて下さるのです。すべてこれ、光明のお育てのおかげです。　　　　　　　　　　　　太字は筆者

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ご書信五十一の十二

　　　無量寿のいのちの誕生と背景そして歩みがすばらしいお例えでお教えくださっています。百回近く拝読させて頂いてようやく機縁熟して聞こえて来ました。実地を通した時間のかかる世界であります。

　一月二十八日にもどります、平松さんの菩提心にお土産として縦二十センチくらい横八十

センチくらいの木に「本願道場」を書かせて頂こうと筆をとりました。ところが道道と間違

えてしまいました。それもよいと置いていたら、中臣さんがとおりかかって「本願道の道」と読

まれました。私はすぐに「の」の一字を小さく入れさせていただきました。二河白道の道のごと

くこの道は趣味や道楽のような道ではありません。人をどうこうする前に、まず自分が救わ

れて行く道であります。大石先生からの求道姿勢のお育ての道でありました。

これからは「本願道の道」と書かせて頂こうと思います。

ここで掲載許可をいただいている二人の同行さんのお手紙を載せさせて頂きます。

拝啓

　　　通信第三十一号　弥陀をたのむ一念のとき

　　お送りくださいましてありがとうございました。今回は特別な思いでうけとりました。不思議な感動を味わいました。仏様からのはげましと仏様に通じ合えている様で力強く感じて来てうれしかったです。それには訳がありました。

　　　主人が十二月二十日に大腸ガンが見つかり入院しました。十二月二十三日手術しました。主治医の先生からは、手術が出来る事は大丈夫ですと言われていました。

　　　主人のいない日が三日過ぎた今日江本先生からの封書が届きましたのでとても心に強く感じたのでした。本当に偶然おもいがけなく重なりました。そして通信を読ませて頂きました。今の私がここに生きている事は本当に多くのご縁の連続でした。大石先生の妹様のギャラリー白川にてはじめて大石先生にお会いした事、また、三重県の内田万吉さんにも員弁郡の小林様宅での聞光洞にて深いご縁を頂きました。

　　　今回主人が入院して考えさせられる事は、不思議に不安や寂しさが起こってこない事です。世間ではこんな事を言ったら、冷たい人間に思われる気がします。こんな自然にいられるのもある先生との出遇いがあります。三重県での出遇いで先生です。平成二十年に亡くなりました。先生に会いに京都の宇治市の自宅へ訪ねて昼食を共にさせて頂きました。その時、帰りぎわに「奥様が亡くなって寂しくないですか」と私は聞きました。そのとき先生は「如来様と二人連れだから寂しくありません」と答えられました。その時からです。私もそういう生き方がしたいと思いました。そして、今があります。わすれません。本当に出遇いの連続でした。大石先生からは「念仏からの一日の出発」をお教えられ「ありがとうございました」と一日終わる。その月日を過ごしています。江本先生との出遇いは松阪市の法盛寺での出遇いでした。

　　　本当に多くのお育てを頂いて来た事をふり返り、考えさせられる日々です。一人に成る時間を作りＣＤを聞きながら今、聖典カバーを作っています。同封させて頂きます。ありがとうございました。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　名古屋市中村区　近藤　正枝

　近藤正枝さんの浄土へ歩まれるすがたが有難いです。

もう一人のお同行は京都の圓徳寺前住職の佐藤淳さんです。平成二十九年の秋の彼岸法要のご縁

でした。お互いに父親を見送ったことで、私にそのことを中心に法話を依頼されたのでしたが、

わたしはそのことには触れずに法話をいたしました。佐藤さんの意に反したのでしょう。「最低

の法話でした」と皆さんの前で言われたので、私も驚いたのでした。

「お寺にご法座が開かれることを願っていたが無理だった。このお寺さんとは縁がなくなるな」という思いで寺を後にしたことはよく覚えています。二年半たってこんな尊いお便りをくださいました。

　　年末に君と話しているときに、亮一君から「あなたは江本さんに対してどれだけ失礼なこと、傷つけることを言ったか覚えていますか」といわれ、自分が言ったことさえ全く忘れて失念していることに愕然としました。

　老化現象の感覚の鈍りや記憶力の衰えはしかたないとしても、人を傷つけることを平気で言って

おきながら、傷つけたという認識さえもなかったということに、我が身のひどさに今更ながらショックを感じました。

　　本当に江本様に悲しい思いをさせるようなことを申しまして申し訳ありませんでした。改めて深くお詫び申し上げます。

　　いつも通信をお送りくださり、ありがとうございます。江本さんにふりかかる出来事やお母様との確執と出会い、次男様の病気の問題など、そのすべてを仏法に問い、親鸞の教えに聞いていこうとされるその姿勢、我が身を通して仏法に問い聞かれて行くそのお姿に頭がさがります。

お母様との関係も、本当に業が深いと申しますか、一筋縄ではいかない関係で、ある意味母とは相性が悪いので、ということで諦めてしまうのが普通ですのに、母に出会えない悲しみを抱えながら、どこまでもその関係を大事にされてお母様と出会って行かれるのを見て、私と母との関係の違いを思わずにおれませんでした。

　母が亡くなって八年になりますが、未だに母に対してしっくりした思いになれずにいます。なぜそうなのか。それはもう私の中で母を切り捨てていたからではないかと思います。自分が

無意識に切り捨てていたからこそ、母は夢にも現れてくれないのだと思います。

　それに対して江本さんはお母様との折り合いも、相性も悪い関係であっても、お母様との関係を切っておられなかったということが、阿弥陀の「摂取不捨」の精神をいただかれていたからではないかと拝察いたします。

　このことで改めておもいますことは、江本さんが阿弥陀の救いの核心である「摂取不捨」の精神をいただくことがお念仏申すことだということを深く認識し、「あなたのそのままを丸ごと受け入れ、引き受けて、けして見捨てません」というお心をいただいておられたからこそ、お母様や次男様と切れることなく、あらためて出会うことができたのではないでしょうか。

　江本さんは信仰者の道を歩まれてきましたが、私は江本さんと知遇を得て以来、江本さんの不思議な魅力に惹かれて来ました。江本さんの語る言葉に自然に涙がこぼれてきたことも何度もあります。人の魂をゆすぶらせるものをもっておられます。

　江本さんを拝見していると、信仰者には徹頭徹尾信仰者に課題をあたえるような縁が訪れます。あたかもそれは、「弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなり」の自覚をうながすためにすべてがあるかのように働きます。しかしこの「親鸞一人がためなり」が中心になりすぎるところに信仰者の落とし穴があるのではないでしょうか。

　なぜなら「親鸞一人がためなり」が中心になると、私の人生に登場する人物をすべて脇役にしてしまうのです。しかし、今回の通信ではお母様と息子様が脇役でなく、江本さんと対等な共同存在の関係になっているように感じました。

　まさしくそれは、「（ダイバダッタ・アジャセ）をして逆害を興ぜしむ、釈迦韋題（イダイケ夫人・実業の凡夫）をして（お浄土）を**ばしめたまえり」**とあるような関係に江本さんとお母様が江本さんと次男様がなったことを意味するのではないでしょうか。

　観経和讃に登場人物の名前がすべて列挙されている意味も登場人物は主役脇役の区別なく、すべてかけがえのない存在であり、共同存在であることをあらわしていると思います。

　それは親鸞自身の言葉で言えば、「いし、かわら、つぶてのごとくなるわれら」であり、共同存在としての私が自覚されています。

　　　以下省略

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　太字とカッコは筆者です

　　写させて頂いて深い所で教えられるお手紙であります。イダイケ夫人の姿と私の在り方が重なったように感じさせられました。母と次男のことは私の思いとしては切っていたのです。しかし、ご本願の方が見捨てなかったというのが事実です。聞法のお蔭です。元農林政務次官が長男を刺殺した事件がありましたが他人事とはとても思えませんでした。私には同行の相談相手がいてくれたお蔭で具体的対応もできました。よき師と同行にられたのです。

報恩講が終ってからの掲示板には

南無の自我に

　　　阿弥陀仏の無我がとどいて

　　　南無阿弥陀仏

　　　頭が下がるうれしさよ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照

と自分の言葉が廻向されました。

の改築をして下さっている御門徒の大工さんが掲示板をよく見て下さるのがご縁となり

ました。塗装のかたに見せると「南無阿弥陀仏やな」とすぐに反応されたので驚きました。それからあまり言葉をかわさなくても親しくなりました。「仏教は宗派がいっぱいあるがどこが違うんかい」と質問されました。次の日に私は応えました「いい質問をしてくれました。仏教には大きく二つの流れがあります。一つには仏教はお釈迦さまから始まっているという立場です。ですから山で修行をしたり、托鉢したり、座禅をしたりしてお釈迦様と同じように修行して悟りを目指す在り方です。それを自力聖道門と言います。特別な人でないと覚りは難しいでしょう。

浄土真宗は弥陀の本願、釈尊の目覚められた法、すなわち南無阿弥陀仏から始まっているのです。自分は無智、無力、無慈悲の立場です。法、本願、念仏をりどころとするから他力です。他力浄土門と言います。他力の信心を頂くことを大事にしています。信心を頂くために、法を聞かせて頂く、すなわち聞法を第一にしています。そのために本堂は門徒が座るところを広く取っているのです。自力の方は儀式などが重んじられますから、内陣すなわち坊さんの座るところの方が広く取っているのです」「ほう、ありがとう。」

　　二月四日の朝、大石先生より一週間前の平成二十年五月六日にお浄土へ還られた吉埼ハツノ（願力院釋尼唯念・行年九十二才）の夢を見ました。ハツノさんは三十代でご主人を亡くし聞法一筋の中で残された五人のお子供さん方を育て上げられた方です。三十二年前長仁寺でご法座を開くことを一番に賛成してくれた方です。聞法が人生の一番大事なことになっておられたご同行さんでした。遺言に「南無阿弥陀仏やった、あんたもここに帰りなさいよ」と、仏様のようなお顔をされて呼びかけてくれました。

　その吉崎さんが夢の中でにっこり笑って「ゆるがんよ」と。また呼びかけてくれました。夢から醒めてすぐに蓮如上人のお言葉が出て来ました。

　　　弥陀をたのめば、南無阿弥陀仏のになるなり。南無阿弥陀仏の主に成るというは、信心をうることなりと云々　また、当流の真実の宝というは、南無阿弥陀仏、これ、一念の信心なりと云々　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　蓮如上人御一代記聞書　二三九

　南無阿弥陀仏のところに親鸞さまも、蓮如さまも大石先生もハツノさんも念仏者の皆さんそして家族も有縁無縁の方々もみんなみんなおられる。

　報恩講が終りそして始まりました。永代供養墓の大石先生のお名号の前で新たに親鸞様のご和讃

が出て下さいました。

本願力にあいぬれば

　むなしくすぐるひとぞなき

　功徳の宝海みちみちて

　煩悩のへだてなし

令和二年（二〇二〇年）二月六日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照